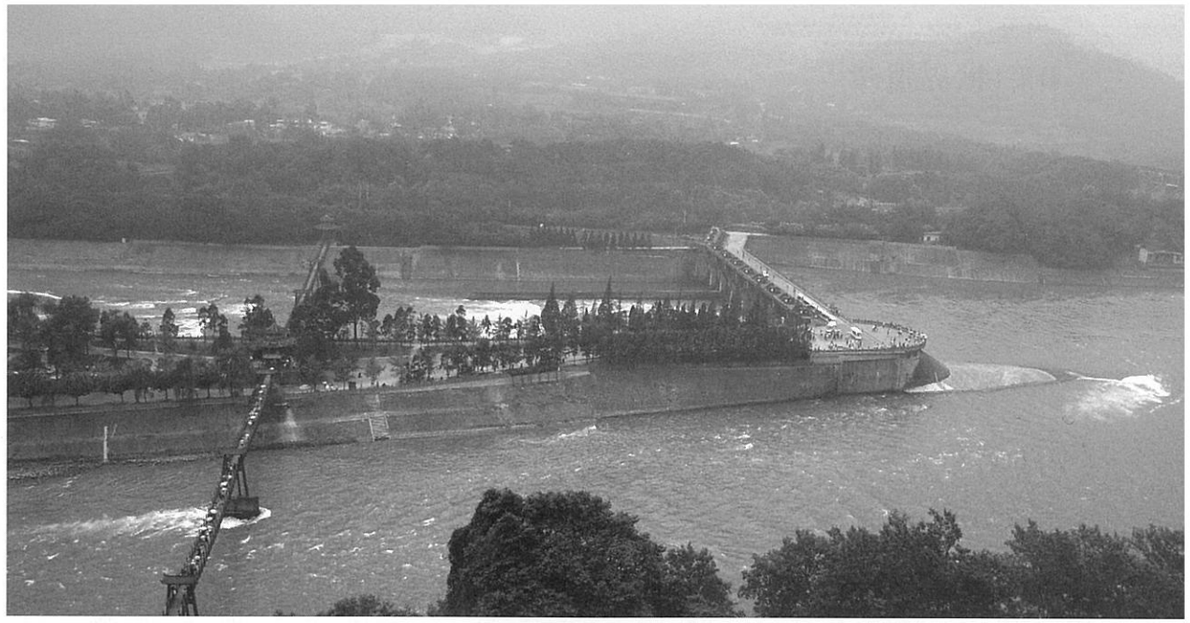


都江堰（中国・四川省）、手前側が分水して四川盆地の灌漑用水となる用水路

想い出に残る世界遺産のこと

西村幸夫 *Nishimura Yukio*

世界文化遺産への推薦

世界遺産にかかわり始めてかれこれ二〇年になる。はじめは国宝のうえにスーパー国宝をつくるような印象で気乗りしなかったのだが、次第にその奥深さに引き込まれていった。世界の四〇〇件以上の登録申請書を審査し、日本の世界文化遺産推薦のほとんどにかかわってきた。世界文化遺産には「顕著な普遍的価値」という物差しがあるので、対象となるのは宗教のエネルギーが創り出した祈りの場や権力者の象徴となるモニュメントが多くなるのはやむを得ないことなのかもしれないが、個人的にはそうしたジャンルに入らない文化遺産に心惹かれてきた。

心惹かれる文化遺産

それはどのような文化遺産かというと、たとえば古代の水利・灌漑施設（都江堰、中国、二〇〇〇年）や二〇世紀の墓苑（スクークスシュルコゴーデン、スウェーデン、一九九四年）などである。

前者は、四川盆地全体に農業用水をもたらした紀元前三世紀の施設で、長江の支流から分水するために巧みな仕掛けを持つ巨大な堰を設けたもので、これによって日本の面積の一・四倍もの耕地を現在もなお潤し続けているのである。工事を指揮した郡の長官、李冰（りひょう）は現在も地元の寺院に神として祀られている。

民の幸せのためにこれだけの大工事を行い、しかもそれが今訪れると風景の中に溶け込み、人為の工作物であるということすら気づかせない、驚くべき土木工事といえる。自分の行いが風景と一体化して二二〇〇年後の人々にも恩恵を与え続けている、これこそ人類が光をあてるべき文化遺産のあり方だと、現地を訪れて深く納得した。

スクークスシュルコゴーデン（スウェーデン・ストックホルム）、墓地の中に森の火葬場などの建築作品が点在している
（写真：筆者撮影）

対する後者は、まったく趣を異にし、二〇世紀前半に造成された共同墓地と火葬場の建物など一連の施設である。ストックホルム郊外にある。死と向き合う姿をこのように昇華させた形で表現され、同時にその地がガーデンとしても機能しているということ、こうした施設を現代人も造れるのだということを教えてくれる大切な文化遺産だと思う。

まちの復活再生にも寄与

ひるがえって、日本の世界文化遺産を考えると、どこも想い出深いといえるが、とりわけ石見（いわみ）銀山の大森地区は世界遺産騒動以前からの長い付き合いがあったので、感慨深い。

銀山の最盛期には、大森地区に二五万人ほどの人が住んでいたという記録もあるようだが、現在は人口四〇〇人の静かな、山あいの集落となっている。しかし、ここにはイノベーティブなアパレル産業の旗手や、芸術家、『日本でいちばん大切にしたい会社』（坂本光司著　あさ出版）に紹介された義肢装具メーカーの会社の人たちなど、じつに熱い人たちがたくさん住んでいるまちなのである。まちを愛する行政マンも多い。

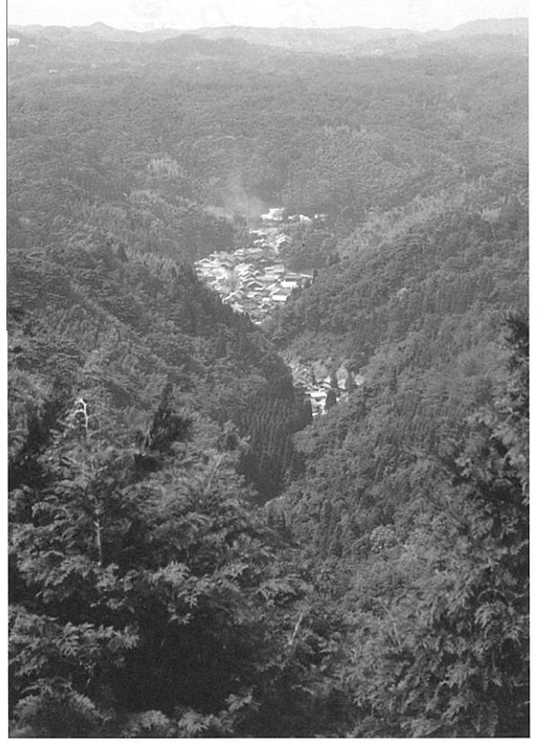
こんなユニークなまちに世界遺産の話が持ち上がった時、何が起きたか。不安や期待が入り混じる中で、市が音頭をとって石見銀山協働会議という話し合いの場が設けられ、数多くのボランティアの参加を得て、地域をもう一度よく知り、今後を見通してまちづくりを進めるための長い議論の末、石見銀山ルールや基金づくりをうたったアクションプランが立てられたのである。世界遺産リストへの登録の一年前だった。

世界遺産に登録されたのちも、当初の混乱はあったものの、現在では、落ち着いた歴史的集落の魅力を保ちつつ、来訪者にも比較的長時間滞在してもらい、満足度も高いという理想的なまちの姿を維持している。

たとえば群言堂のデザイナー、松葉登美さんが暮らしつつ運営している他郷阿部家では、県指定文化財の武家屋敷の建物を活かしつつレトロモダンに改装し、暮らすように泊まる宿が実現している。中村ブレイスの中村俊郎さんは、会社の社会貢献の一環として旧郵便局を改装した世界一小さなオペラハウス「大森座」を二〇一五年にオープンしているのをはじめとして、これまでに五五軒もの古民家再生を果たしている。

大森のまち自体も重要伝統的建造物群保存地区として無電柱化が進むなど、再生が進んでいる。まちが内からも外からも文字通り復活再生を果たすということが世界遺産リストへの記載と並行して起きてきている。世界遺産はけっしてモニュメンタルなスーパー国宝だけを対象としているわけではないということをこうして実証してくれているのである。

にしむら・ゆきお●一九五二年、福岡市生まれ。東京大学助教授などを経て、九六年より東京大学教授。専門は都市計画。工学博士。主な著書に『西村幸夫 風景論ノート』（鹿島出版会）、『都市保全計画』（東大出版会）など。日本イコモス国内委員会委員長、元国際イコモス副会長。



島根県大田市の仙ノ山から見た大森の集落
（写真：大田市資料）